

# 認知症の妄想

## Delusional thoughts in dementia

熊本大学医学部附属病院神経精神科／講師

橋本 衛\*

### 1. はじめに

認知症にみられる精神症状と行動障害は、認知症の中核症状である認知機能障害以上に患者の QOL を低下させ、介護者の負担を増大させることが知られている<sup>1)</sup>。従来、周辺症状や問題行動などと呼ばれてきたこれらの症状は、最近では BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) 「認知症の行動および心理症状」と呼ばれるようになり<sup>2)</sup>、改めて注目を集めている。数ある BPSD の中でも妄想は最も代表的な症状であり、その病態を適切に把握し治療することは、患者や家族の生活をマネジメントするうえで極めて重要である。そこで今回認知症患者の妄想についてその発現要因を中心に検討した。

### 2. 認知症疾患別の妄想の頻度

妄想は認知症に幅広く出現することが知られているが、アルツハイマー病 (AD) 以外の認知症疾患ではその出現頻度はほとんど知られていない。そこで 4 大認知症 (AD、レビー小体型認知症 (DLB)、血管性認知症 (VaD)、前頭側頭葉変性症 (FTLD) ) における妄想の出現頻度を検討した。2007 年 4 月から 2011 年 3 月の 4 年間に熊本大学病院神経精神科認知症専門外来を受診した 4 大認知症患者連続 540 例に対して、Neuropsychiatric Inventory (NPI) 日本語版を実施し、各疾患における妄想の有症率を調べた。表 1 に患者プロフィールを示す。

結果を図 1 に示す。AD では全患者の 26.1% (85 人) に妄想がみられた。55 の論文をレビューした Ropacki らの報告によれば、AD における妄想の有症率は 9.3-63% で中間値が 36% であったが<sup>3)</sup>、今回の

結果もこの範囲内であった。DLB では 61.1% の患者に妄想を認め、4 大認知症の中で最も有症率が高かった。FTLD では妄想を呈した患者はわずか 1 人のみ (2.4%) で、Mendez らの報告 (2.3%) とほぼ同じであった<sup>4)</sup>。FTLD で妄想が少ない理由として、辺縁系の障害が軽いことや、他者への無関心が優勢な

表 1 各疾患の患者プロフィール

	患者数 (男/女)	年齢	MMSE
AD	326 (112/214)	75.3 ± 8.4	19.3 ± 5.2
DLB	95 (41/54)	78.8 ± 5.5	19.0 ± 5.4
VaD	77 (41/36)	70.7 ± 12.7	20.2 ± 6.0
FTLD	42 (18/24)	68.7 ± 9.6	17.8 ± 7.1

Values are mean ± SD

AD: アルツハイマー病

DLB: レビー小体型認知症

VaD: 血管性認知症

FTLD: 前頭側頭葉変性症

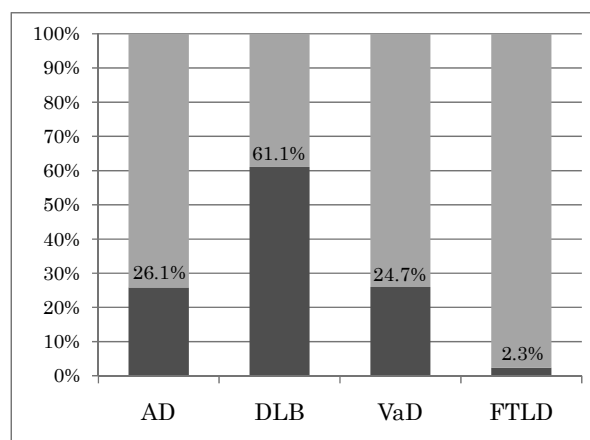


図 1 各認知症疾患の妄想の有症率

\* Mamoru HASHIMOTO, M.D., Ph.D: Department of Neuropsychiatry, Kumamoto University Hospital.

FTLD では、対人関係の中で生じる妄想は引き起こされにくいことが推察された。疾患によって妄想の有症率が異なるという今回の結果は、妄想の発症には心理社会的要因や環境要因だけではなく、疾患特有の生物学的要因が関与していることを示していた。特に DLB には妄想を引き起こしやすい神経基盤があることが示唆された。一方 FTLD でほとんど妄想を伴わなかった今回の知見からは、妄想を認めることは FTLD 診断を示唆しない所見と考えられた。

### 3. 認知症の物盗られ妄想

物盗られ妄想は認知症の妄想の中で最も頻度が高いとされ、われわれの検討でも、妄想を呈する AD 患者の 62% (85 人中 53 人) に認められた。物盗られ妄想は、欧米では男女に差がないとする報告が主であるが、我が国では女性に多いとされ<sup>5)</sup>、我が国特有の、女性が主として家事を担う社会文化的要因が関与していると考えられている。物盗られ妄想を疾患別に比較した報告は少なく、今回、AD、DLB、VaD の物盗られ妄想の有症率と男女差を検討した。なお対象は前研究と同じであり、評価も NPI の妄想の下位項目を用いた。

結果を表 2 に示す。原因疾患によって物盗られ妄想の有症率は異なり、DLB で最も高く (24.2%)、AD がそれに次ぎ (16.3%)、VaD で最も低かった (11.5%)。疾患を問わず男性よりも女性に多く、女性の有症率はどの疾患でも男性の約 2 倍であった。本結果は、物盗られ妄想の発現には疾患要因と社会文化的要因の両者が関与することを如実に示すものであった。

### 4. AD の皮質下虚血性病変と妄想の関連

AD 患者を対象として、皮質下虚血性病変が患者の認知機能障害ならびに BPSD に及ぼす影響につい

て検討した。150 例の probable AD 患者を MRI T2 強調画像、FLAIR 画像を用いて皮質下虚血性病変あり群となし群の 2 群に分類し、2 群間の認知機能 (MMSE、ADAS 再生・再認スコア、数唱、語列挙数) と BPSD (NPI の下位項目スコア) を比較した。

表 3 に 2 群の患者プロフィールと認知機能検査結果を示す。皮質下虚血性病変あり群となし群の間で MMSE 得点に有意差はなかった。また記憶を評価する ADAS 再生スコア、再認スコアのいずれも 2 群間で有意差はなかった。数唱課題は、虚血性病変なし群の方があり群よりも有意に成績が良かった ( $p=0.03$ )。語列挙課題は動物 ( $p=0.004$ )、語頭音 ( $p=0.02$ ) とともに虚血性病変なし群の方が有意に良かった。NPI については、皮質下虚血性病変あり群で幻覚、妄想のスコアがなし群よりも有意に高く (幻覚  $p=0.002$ 、妄想  $p=0.025$ )、その他の下位項目においては 2 群間で有意差はなかった (図 2)。

AD 患者の皮質下虚血性病変は全般的知的機能、記憶機能には影響しない。しかし AD に皮質下虚血性病変が合併することにより、前頭葉-皮質下回路が障害され、実行機能や注意機能が悪化する可能性が示唆された。さらに皮質下虚血性病変を有する患者の方がそうでない患者よりも有意に妄想、幻覚のスコアが高かったことから、AD 患者の皮質下虚血性病変は妄想のリスクとなると考えられた。

### 5. おわりに

認知症患者の妄想の発現には、生物学的要因、環境要因、心理社会的要因などさまざまな要因が関与していることが今回の検討により示された。これらの知見は、認知症患者の妄想の治療を行う際には、原因疾患ならびに妄想の内容、患者背景などを詳細に把握したうえで、多面的にアプローチすることが重要であることを示唆している。

表 2 物盗られ妄想を認めた患者の数と有症率 (疾患別、男女別に分析)

	男性	女性	合計
AD	11/112 (9.8%)	42/214 (19.6%)	53/326 (16.3%)
DLB	6/41 (14.6%)	17/54 (31.5%)	23/95 (24.2%)
VaD	3/41 (7.3%)	6/36 (16.7%)	9/78 (11.5%)

表 3 患者プロフィールと認知機能検査結果

	血管病変あり群	血管病変なし群	p 値
年齢	77.8 ± 5.6	74.5 ± 7.4	0.002
男性/女性	29/40	23/58	0.08
危険因子あり (%)	71.0	45.7	0.002
MMSE	19.5 ± 4.9	19.8 ± 4.8	0.67
ADAS 再生スコア	6.0 ± 1.3	5.9 ± 1.3	0.63
ADAS 再認スコア	3.8 ± 2.8	3.7 ± 2.8	0.82
語列挙 (動物)	8.3 ± 3.7	10.1 ± 3.6	0.004
語列挙 (か)	5.1 ± 3.1	6.3 ± 3.1	0.02
数唱	9.2 ± 3.1	10.4 ± 3.1	0.03

Values are mean ± SD

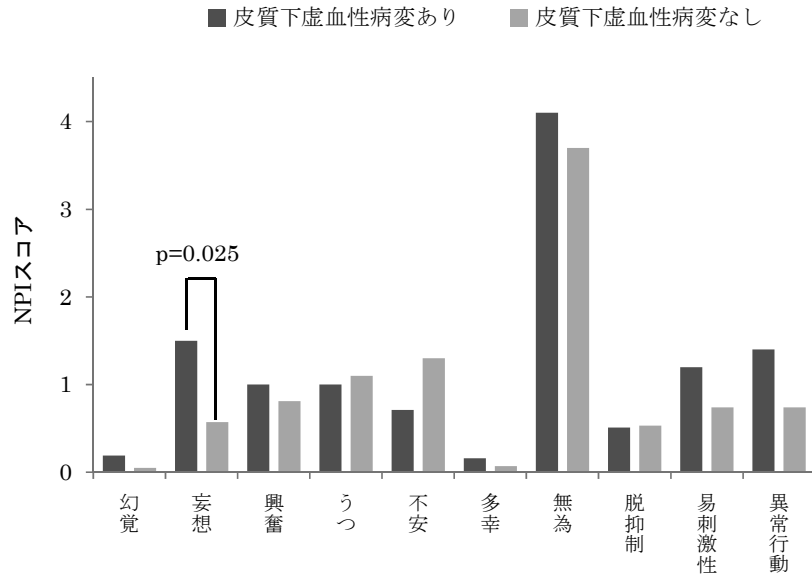


図2 AD患者における皮質下虚血性病変の有無とBPSDの重症度との関係

文献

- 1) Burgio L : Interventions for the behavioral complications of Alzheimer’s disease: Behavioral approaches. *Int Psychogeriatr* 8(Suppl 1): S45-S52, 1996
- 2) Finkel SI, Costa e Silva J, Cohen G, et al.: Behavioral and psychological signs and symptoms of dementia: a consensus statement on current knowledge and implications for research and treatment. *Int. Psychogeriatr* 8(Suppl.3): 497-500, 1996
- 3) Ropacki SA, Jeste DV. Epidemiology of and risk factors for psychosis of Alzheimer’s disease: A

review of 55 studies published from 1990to 2003. *Am J Psychiatry* 2005; 162: 2022-2030.

- 4) Mendez MF, Shapira JS, Woods RJ, et al. Psychotic symptoms in frontotemporal dementia: prevalence and review. *Dement Geriatr Cogn Disord* 25: 206-211, 2008.
- 5) Ikeda M, et al. Delusions of Japanese patients with Alzheimer’s disease. *Int J Geriatr Psychiatry* 2003; 18: 527-532

この論文は、平成23年7月30日(土)第25回老年期認知症研究会で発表された内容です。